

松江市立鹿島歴史民俗資料館だより

No.46

2026年2月発行

■ 貝輪をつけた子どもたちー古浦砂丘遺跡の貝輪

松江市鹿島町の古浦砂丘遺跡は、日本海に面した風成砂丘上にあります。以前は建設工事用の砂取り場所にあたり、その際土器や人骨が採取されていました。島根大学の山本清教授に続き、1960～1964(昭和35～39)年に当時鳥取大学教授であった金関丈夫さんを団長とする発掘調査団によって発掘調査が行われ、弥生時代前期から古墳時代にかけての集団埋葬墓地であることが分かりました。海岸砂丘に含まれる細かい貝殻のカルシウム分に守られ、約60体の人骨や土器が良い状態で見つかっています。

副葬された土器や層位から、約40体の人骨は弥生時代前期のものと考えられ、高身長、高顔の特徴から、中国大陸や朝鮮半島の系譜をひく、いわゆる渡来系の人々だと報告されています。

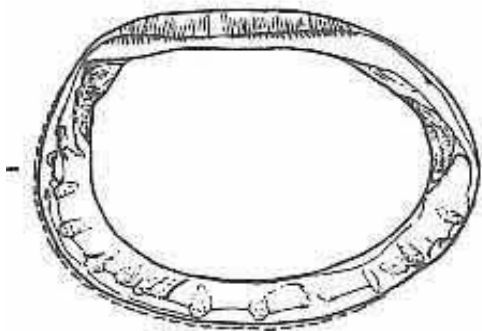
この墓地には大人だけでなく、子どもたちも埋葬されています。特徴的なのは、多くの幼児が貝製のブレスレットをはめていたことです。このうち、2号人骨とよばれる幼児は右手に6個、左手に8個、なんと合計14個の貝輪をはめていました。この貝輪は、2枚貝のハイガイに穴をあけ成形し、周囲は丁寧に磨かれています。ハイガイはアカガイやサルボウと同じ仲間で、泥土に生息し、古浦周辺では見られないものです。

他にも、オオツタノハという南海産の貝で作った貝輪を装着した子どももいました。

材料を入手し自分たちで貝輪をつくったのか、それとも製品として貝輪を手に入れたのでしょうか。子どもたちは普段から貝輪を身につけて暮らしていたのか、それとも死出の旅への装いだったのでしょうか。



29号人骨が身につけていた貝輪。左奥ハイガイ製、右オオツタノハ



2号人骨が身につけていた貝輪の実測図。ほぼ実物大



2号人骨。右手に6個、左手に8個のハイガイ製貝輪をつける

また、貝製のビーズも見つかっています。28号人骨(2～4歳)の周囲からみつかった2396個の貝小玉は、直径2～3ミリ、厚さ1ミリ前後の小さなものです。展示では便宜上ネックレスにしていますが、出土状況から衣服に縫いつけられていたものと想定されています。スパンコールのように輝いていたことでしょう。

これらの貝輪や貝小玉は、常設展で展示中です。